

明治初年の東本願寺上海別院における日中文化交流

—松本白華・北方心泉を中心に—

川 邊 雄 大

I はじめに

1 研究の背景

明治以降の日中文化交流とくに清国文人たちとの交流に関わる研究として、古くは『東亜先覚志士記伝』¹⁾『対支回顧録』²⁾等の邦人伝記がある。また実藤恵秀は日本国内における清国公使館員・清国留学生たちの活動を中心に研究を行っており³⁾、最近では中国人研究者の研究が活潑である⁴⁾。しかし、従来の研究対象は、軍人や外交官が多く、民間人とくに宗教者の研究については不十分な面があった。

一方、海外布教に関する研究の中では、本願寺関係が多く、中でも明治初期にいち早く中国布教に着手した真宗大谷派（東本願寺）については比較的研究が多いのが特徴である⁵⁾。しかし、これらの布教活動に関する研究は、本願寺の新聞・雑誌等の刊行物を主な資料としており、個々人の伝記研究や布教体験に関するは充分に行われていない。上記のような研究状況をうけて、筆者は従来の研究成果をふまえ布教僧の個人資料の調査を進め、実証的に考察することを目的として研究を進めて来た⁶⁾。

本稿では、明治初年に清国で布教活動に従事した真宗僧、松本白華⁷⁾・小栗栖香頂⁸⁾・北方心泉⁹⁾・岳崎正純¹⁰⁾等の日記や書翰を資料として、布教活動が開始された明治初期と本格的に再開された明治30年代とを比較して、時代や取巻く状況の変化について述べていきたい。具体的には、①中国布教に先立つ松本白華らの洋行時、②小栗栖香頂の北京滞在時、③日本仏教が始めて海外に設置

した上海別院での布教活動の実態、とくに各個人の中国体験・詩文を介した清国の文人たちと交流の事実を明らかにしたい。

Ⅱ 海外布教に至るまでの経緯

1 東本願寺と明治政府の関係

一般的に仏教諸宗は明治維新によって大打撃を受けるが、東西本願寺の被害は比較的少なかったとされる。しかし幕末期、東本願寺は西本願寺とは対照的に幕府方についており、二度に亘る本堂の焼失により、再建費用がかさむ状況にあり、財政問題は明治に入っても長く尾を引くこととなる。明治初期には従来の坊官制度が廃止され、石川舜台・渥美契縁等5名の僧侶を中心に宗務が行われるようになった。これらの人物は宗学の面では香山院門下であり、白華もその一人であった。また基礎学としての漢学では、当時の真宗僧には日田・咸宜園の出身者が多数あり、白華の友人であり明治6年(1873)到北京に赴いた小栗栖香頂、その弟で白華とともに玉川・香草吟社に参加していた小栗憲一、白華とともに洋行した関信三などがそうであった。白華は日田の咸宜園出身ではないが、大坂の広瀬旭莊に入門しており、咸宜園の流れをくむ人物であるといえる。

明治5年(1872)には教部省が組織され、当時上京していた白華は教部省十等出仕・兼中講義となった。同時に咸宜園出身者を中心に構成されていた玉川吟社・香草吟社に所属している。吟社の主催者は当時文部省と教部省を兼務した長三洲であり、同人には隄静斎のように長の斡旋によって政府に出仕した者もあり¹¹⁾、白華もまた長三洲を介して木戸孝允や大隈重信に接近した結果、その洋行が実現したと考えられる。現存する白華から江藤新平宛の書翰¹²⁾では、白華が門主を紹介しており、当時司法卿であった江藤の意嚮を受けつつ、白華が主導する形で洋行が行われたことが分かる。また、従来いわれているとおり¹³⁾、洋行に際しては政府から借金をし、司法省の官員たちと同行しているので、政府の援助と密接な関係があったことは間違いない。

こののち明治6年(1873)には、白華らの洋行に刺戟される形で、白華の帰朝

直前に小栗栖香頂が北京に渡航している。明治9年(1876)には、南条文雄と笠原研寿がインド学を学ぶために英国に派遣されている。これもまた、白華たちが洋行中に欧洲のインド学研究に刺戟を受けた結果である。

一方、上海別院が設置されたのを皮切りに、翌年には朝鮮・釜山に別院が設置され、海外布教活動が開始された。

また、国内では北海道(明治3年)・監獄内(明治5年)・鹿児島(明治9年)・沖縄(同年)・隠岐(明治10年)で布教活動が開始されている。

なお、西本願寺は明治19年(1886)のウラジオストック布教を、浄土宗は明治27年(1894)のハワイ布教を海外布教の嚆矢としていることからみても、東本願寺の海外布教がいかに早く開始されたものであるかが分かる。

2 松本白華たちの洋行

明治5年(1872)9月13日、白華たち東本願寺一行(新門主・大谷光瑩、石川舜台、関信三、成島柳北)は日本を旅立った。『松本白華航海録』¹⁴⁾からは白華が欧洲で政府・西本願寺関係者とはほぼ毎日のように頻繁に接触していたことが分かる。

白華は光瑩の代筆を含めて、国内の政府関係者や本山および真宗僧に向けて書翰を書いており、日本からも頻繁に書翰を受取っている記述がある。また電信により旧暦11月23日には太陽暦の採用を知っている。柳北もしばしば日本に書翰を出しているが、その通信方法は帰国する日本人に書翰を託す、ポストに投函、あるいは郵便局に行って書翰を出すなど様々であり、のちの小栗栖香頂の北京滞在時と比べると非常に通信が頻繁である。

白華一行出発後の同年10月13日に、小栗憲一は白華宛の書翰を認め、それを江藤新平に託して白華に達しようとしている¹⁵⁾。その内容は以下に掲げた通り、白華ら出発の記事や、その後に起こった琉球藩設置・地租改正・大教院の諸規則改正について述べ、さらに小栗は白華に対して宗教行政の視察、報告書提出を促している。本書翰は残念ながら白華には届かなかったと見られるが、『松本

白華航海録』には、これら日本国内の出来事が記述されているので、他の人からの書翰や送られてきた新聞で情報を入手したことが分かる。

御出立翌日、新聞に早速差出候処、已に早キ奴が諸君の旧寺號并に新名等を以て、皆脱走せりと書せり¹⁶⁾。余之新聞には大にほめてあり、只一事掛念すべきは、安休寺猶龍事、当時、安藤劉太郎とあり。これは万一、教師の添書に差支共はなきやと思ふなり。本願寺と同行之三客と云たらは甚不都合なり。関信三と云々とは彼等未知故、裕純等エ風可被下候。(中略) 司法卿も未御出船無之、其期末相分不申候。岩井も日々轉變日新なり。僧侶は却而苗字を御取用候の大政官御布告あり¹⁷⁾。(中略) 魯又皇子、一昨日、当港着なり。琉球は改て藩王に成り、真の属国となる。朝鮮には大に応接となり、此程陸軍少将も出張の由、ゆくゆく目的あるべし。天下租税法一定、愈地券に相成、当時井上大輔も御出張になる筈と申す事也。井上大輔も先日母死去、大ナル葬式あり。(中略) 貴君に急速相願度は、各国大小教院の規則なり。何卒一日も早く御訳文を以て御送り可被下候。仏丈にもよけれども、可相成は英の教院規則が入用なり。此地にて訳させ候得共、兎角不分解のこと多し。(中略) 此書状は司法卿に御願申上置候也。(以下略)

皇十月十三日 ヨコハマより

一方、白華から江藤へ出された書翰が残っている¹⁸⁾。書翰には白華がヨーロッパで蒐集しているキリスト教などに関する情報が記されており、『松本白華航海録』にある白華たちがロニーを訪れ、歐洲の宗教事情について聴取していたことを裏付けるものである。

少子輩種々宗教学贅坏搜索仕候得共、訳ニ依テ聞取候儀隔皮抓癢之風情ニ御座候得共、幸ニ羅尼¹⁹⁾并離西ナト申候究理ニ相隨、所謂ヒロソヒーナル者ノ一端ヲ相伺候。宗教ノ徒ニハ本国ノミツシヨ子ルヨリ添書モ有之、旧新両

教トモ搜索ノ道ヲ得テ十分ニ相調申候。旧教不足取不足論、ソノ弊ハ多キ欧人モ喋々論ジ候書籍数多²⁰⁾、政府ニモ能々存申上候。併愚人之信未タ醒メス、不得止政府ニテ保候。新教ヨリ大ニ侮弄ヲ受ケ、旧教改革ノ手有之候。ソノ新教ト云共理学者ハ不取。今後ハ新教ヲ面目ヲ改め須ハ、ヒロソヒニー圧セラレン。我宗教ノ事、追々羅尼氏ナゾヘ御聞候処、真理アリ。欧洲ニ寺院ヲ建レハヨシナソト申候。併旧教者ヨリ新聞ヲ以テ我徒ノ欧巴里ニアルヲ悪ムコト多シ。教会新聞抄出仕置候。愚ナル哉、洋教者ノ狭キコト可笑至ニ御座候。(中略)サテ拿破侖三世儀モ一敗後ハ倫敦ニ客居然ルニ、本月病性石麻ニテ死候由²¹⁾。嗚呼、匹夫ニ起テ一時ニ雄視シ末路郎当可哀モノ御座候。李ノビスマルク夢初穩ナルヘシト存候処、サスカニ英雄、大ニ拿破侖ノ死スルヲ悼ミ兼テ約ノアルニ背タリト申候由。(以下略)

明治六年正月十五日²²⁾ 仏国巴里ニテ 松本白華拝具

政府使節団に附随する形で行われた本願寺僧たちの洋行は、島地黙雷をはじめとする西本願寺側は、いわば近代国家における信教問題（信教の自由・政教分離）の取扱いに関する調査を目的としたと、今日のみからは見える。一方、東本願寺側とはいえば、白華たちの洋行は東本願寺から正式に認められたものではなかったので、のちの小栗栖兄弟による『支那開教見込』のような、本山に対する提言あるいは報告等はみられない。また、政府との関係も曖昧なままであったので、小栗憲一が白華に求めたような政府に対する建白書のたぐいも、彼らの洋行の後楯であった江藤等が征韓論争で失脚したために、建白を提出する相手を失ったといえる。この点で、木戸の後楯を得ていた島地ら西本願寺とは対照的である。さらに、のちに光瑩と白華との間に確執が生じ、彼らの洋行は不十分なままに終わってしまった。

白華は翌年7月29日に光瑩と帰国する。帰国後、本山執事補を拝命するが、門主との確執からか教部省に再出仕した。すでに江藤は下野し、三条実美も征韓論争で苦境に立たされていた。白華を抜擢したのは大久保利通であったと思

われる。しかし、翌年に教部省は廃止され、白華は結局本山に復帰を申し出た²³⁾。

『松本白華航海録』と『白華餘事』には洋行に関する漢詩が収録されているが、『松本白華航海録』中に見える漢詩は、欧洲へ向かう航海中に作られたものであり、欧洲に到着した後の漢詩は収録されていない。また、『白華餘事』では、「明治五年九月扈從大谷新法主将拜印度靈蹟」（七言律詩一首）、「印度雜詩」（七言絶句十四首）、「彼皚々者」（七言古詩）、「巴黎市觀奈破翁石像」（七言絶句）、「伯林公館謁岩倉公」（七言絶句）、「自欧羅帰」（七言律詩一首）を収録しているが、最後の2首に白華の洋行に対する心情がよくあらわれている。

伯林公館謁岩倉公

欧羅宗教略相同 恫喝欺人多弊風

猶有上申心未尽 客中献策謁岩公

『松本白華航海録』によると、明治6年5月2日に白華はベルリンの大使館で、政府使節団大使・岩倉具視に謁見している。白華はキリスト教は新教旧教ともに人を惑わすものとして否定的にとらえており、日本にいたときから洋行時に到るまで、ずっと積極的にキリスト教に対して活動しており、旅先で謁見した岩倉具視にも建白を行ったことを述べている。また、「自欧羅帰」では、

亜尾欧頭萬里蹤 名区到处手栽松

雪花雁影魯西夏 螢火虫声印度冬

客裏工夫多画餅 管中見聞悉屠龍

帰来十丈紅塵底 猶夢袈裟攀鷲峰

とのべ、アジアから欧洲までを旅し、雁が飛んでいるロシアの寒い夏や、螢が飛び虫の音のする印度の冬を経験し、欧州でもキリスト教に関する様々な活動を積極的におこなったものの、これらの努力は全て徒労に終わり、帰国後は教

部省の役人となったものの世間の雑事に煩わされ、再びもとの僧侶に戻りたいという白華の気持ちがうたわれている。

3 小栗栖香頂の渡清

松本白華の帰国直前、明治6年(1873)7月17日に小栗栖香頂は清国に渡航し、約1年間北京に滞在した²⁴⁾。彼は寺子屋に通って中国語を学び²⁵⁾、寺院に住込み、主に僧侶とくに龍泉寺の僧侶、本然とは交流を深め仏教について議論をおこなっている。当時、北京には香頂以外に日本人はおらず、すべて香頂独力で開拓しなければならなかった生活は、日本人と接することの多かった洋行時の白華たちとは異なる。また、後の布教時と比べても稀有な例である。

小栗栖香頂は『北京紀遊』の中で渡清の目的を以下のように述べている²⁶⁾。

凡頂(※香頂)之志願四、一学京音、二学京語、三接名僧碩学、四問護法大策。

つまり、小栗栖香頂の渡清の目的は、①②中国語(北京語)を習得すること。これは中国でキリスト教宣教師にならって文字の読めない下層民に、土音すなわち口語で布教するためである。③学識のある名僧に接すること。④日中印三国仏教同盟を提唱して基督教阻止を説くことであった。このほか五台山などの各地の寺院を視察しており、清末中国仏教の現状を認識した初めての日本人といつてよい。

香頂は渡清直後、本山から「支那国弘教係」に任命され、本山に対して弟の憲一を通じて『支那開教見込²⁷⁾』を提出しており、白華らの洋行とは異なり公式な派遣であるといえる。

この『支那開教見込』は、北京滞在中に香頂が日本にいる弟・憲一にあてた書翰から、憲一が必要な部分を抜粋して作成し、本山に対して中国布教の提言として提出したものである。この中で小栗栖香頂は次のように述べている。

真宗ヲ興サント欲セハ、長城以東ノ地ニ一本書ヲ作ルヘシ。長城以西ハ喇嘛教大ニ繁昌シテアリ。回教モ及ハヌ。長城以西ノ旧漢地ハ南京ヲ以テ中央トスヘシ。南京ニ寺ヲ作ルコト大ニ可ナルヘシ。爰ニ東西ノ御連枝一人ヲ廟主トスヘシ、舟ノ便モヨシ、内には本願他力ノ利アリ、外ニハ肉食妻帯ノ便アリ、大ニ学校ヲ立テ、天台以来ノ教化ヲ講シ、日別ニ説法会ヲ開ハ、支那僧モ始ハ妬ムヘシ、次ニ陰ニ罵ルヘシ、後ニ一同帰依スヘシ。小子飽迄支那僧ノ真宗ニ帰スル兆アルコトヲ目撃セリ。

先南京ヲ本書トシテ、十八省ニ兩人宛道心堅固ノ僧ヲ遣リ説教セシムヘシ。寺ヲ作ルニハ及ハヌ、フルキ寺イクトモアリ、買ニモ可ナリ。亦仏蘭斯僧ノ如ク商府ヲ開クヘシ。仏蘭斯僧ノ親切ナルニハ、支那モ陰ニ感心セリ。初メ来ル者、三年ノ間言語ヲ学問ニ、行状ト云ヒ親切ト云ヒ、皆々感心シテ仕舞ナリ。其後ハ出入共ニ説教ス。多人一人ヲ選ハス、依テ当時彼徒ノ入ラヌ処ハ十八省内湖南ノミト云ナリ。支那人ハ格気深キ癖アレトモ、僧ノ此ニ妬気ヲ挾ナサルハイカニモウルサキコト也。依テ我輩急ニ力ヲ尽シ、布教ノ仕方ハ仏蘭西ヲ手本トスヘシ。

また、香頂が北京時代を記した『北京紀遊』42節には以下のような記述がある。

布教自支那始、置本山於南京、置支院於十八省、以連枝為支那教主、選人材、分掌各省教務。

日本本山、設外国語学校、以授布方法。(中略)選能漢文者、撰真宗教旨・往生伝・布教史伝・孝子伝・伝記以流芳千歳為上榮、不以堂班門地以榮。

つまり、清国において布教する地域はイスラム教とラマ教の競合しないところが適当で、具体的には南京を拠点として布教活動を行い、学校を設立し、キリスト教宣教師たちを手本として中国語を学び、親切に中国の一般民衆に接す

ることを説いている。また漢文で真宗教義を著することが出来る人物が不可欠であることを説いており、香頂は帰国後は著作活動を始め、『真宗教旨』『真言宗大意』『喇嘛教沿革』を著している。中でも漢文で書かれた『真宗教旨』は、のちに清国および朝鮮布教のテキストとなるものである。

香頂は北京滞在時から清国における布教活動の方法をこのように具体的に考えており、後年の東本願寺の清国での布教活動を見ていくと、明治9年(1876)に江南の上海に別院が設置され、明治30年代に布教活動が本格的に再開された時には、両連枝が各地を視察し、南京をはじめ江南・華南各地に学校が設立されており、香頂の提言が次第に実現されていったことになる。

Ⅲ 上海別院について

1 明治前期の上海別院

1-1 上海別院の組織と沿革

小栗栖香頂一行は明治9年(1876)7月7日に神戸を発ち、同13日に上海到着、8月20日にイギリス租界に東本願寺上海別院を開設した²⁸⁾。渡航に先立って小栗栖香頂は外務卿寺島宗則に布教について相談し、理解と激励を受けたとされる。

当日の開院式で香頂は「南京語」で説教を行い、漢文で書かれた自著『真宗教旨』や『真宗説教』(一枚刷のパンフレット)を配布したとされる。開院式には在留邦人・領事館および清国僧侶の参列はあったものの、清国側高官の参加はなかった。これは東本願寺がいまだ上海において清国側の要人、とくに政府関係者と関係を構築していないことを示している。

別院設立当初の主な目的は中国語説教による布教と、中国語で説教が出来る日本人僧侶の養成であった。当時、真宗僧の中で中国語の説教ができるのは小栗栖香頂一人であったので、実際に布教活動を行うためには、中国語の出来る日本人僧侶を養成しなければならなかったのである。

別院開院に先立つ7月19日には日本領事館内にすでに学校が設置され、孫藹

人が雇庸され、続く8月23日には別院の翻訳説教を行っていた任鈞溪が雇われている。日本から派遣された留学僧は、はじめ崖辺賢超と日野順証のみであったが、のちに9名の学生が引率されてやって来る。これが10月18日に本山より認可された江蘇教校であり、日本人が中国において最初に設立した中国語学校といってよい。

「清国教校条規²⁹⁾」第一章の総規に

一（前略）中ニ就テ土音土語ニ通スルヲ第一ノ急務トス

一 各省教校共其所在ノ土語ニ通スルヲ本トス、而テ各省中音ノ正キ者ヲ北京南京ノ両音トスレハ、三經四書等ノ如キハ外省ノ音ヲ以テハ念スヘカラス、故ニ南部ノ教校ニ於テハ南京音ヲ以之ヲ念シ、北部ノ教校ニ於テハ北京音ヲ以テ之ヲ念スヘシ

とあり、また同条規の「課業表」には「土語、（上等）通弁・（中等）綴語五十篇・（下等）六千語」「両京音、（上等）聖武記／西洋記・（中等）四書／十八史略／元明史略・（下等）三經」とある。つまり、上海別院の江蘇教校では、土音土語（上海語）と南京音を教えており、日常会話（白話）は土音土語（上海語）を、書物（文言）を読むときは南京音を用いていたと思われる。また別院開院初期には任鈞溪が説教を行っているが、彼の出身と説教する対象を考えると、その説教は上海語で行われたとみて間違いない³⁰⁾。その上、初期の記録では説教の試験は「上海土語検査³¹⁾」となっており、説教のための上海語の試験が行われたことがわかる。

明治9年（1876）11月1日付けで石川舜台（本山寺務所長）にあてて提出した河崎顕成（上海別院輪番）「上海別院公務」³²⁾によれば、当時の日課は以下の通りとなっており、中国語だけではなく宗学・漢学・習字を教えていたことが分かる。

日課表

午前七時	吃飯
同 從八時至十時	語学
同 從十時至十二時	同 復習訳解
正午	吃飯
十二時三十分ヨリ午後一時マテ	休業
午後一時ヨリ二時半マテ	宗乘講解
同 二時半ヨリ四時マテ	漢籍講解
同 四時半ヨリ五時マテ	習字
同 六時	吃飯
同 六時三十分ヨリ八時マテ	運動
同 八時ヨリ十時マテ	宗乘漢籍復習

また、布教僧たちの職掌を規定したものに「上海別院公務³³⁾」があり、第三章「本院職制并事務章程・職制」に以下のような記述がある。

輪番 一人 本堂勤行式等ノ事ニ任シ、学師教師及生徒ノ能否ヲ監別シ、院内百般ノ事務ヲ法例規則ニ照シテ之ヲ統理スルヲ掌ル

学師 無定員 編輯及ヒ語学ヲ專ラトシ、生徒ヲ引率教授シ、清国僧徒及儒者等ヲ帰化セシムルヲ掌ル

教師 無定員 專ラ布教ノ事ニ任シ、風土人情ヲ監識シ、機ニ応シテ筆談口授ヲ以テ内外国人ヲ信徒ナラシムルヲ掌ル

以上其職掌ヲ区分スト雖、創業ノ際互ニ協議戮カスヘシ

これによると、輪番は別院内の責任者であり、布教僧（教師・学師）の職務は主に生徒の監理・教育および説教であると規定されている。

このほか別院では、在留邦人の子弟教育のために、別院設立後まもなくの明

治10年(1877)9月1日に育嬰堂(のち親愛舎・復習席・開導小学校)が開設され³⁴⁾、日本から医師早川純嘏が派遣された。また日本人墓地の管理も別院が行うようになった。明治10年代半ばには日本人医師が上海に開業するようになり、日露戦争後の明治39年(1906)には日本人会である上海居留民団が設立、学校・墓地の管理が移管され、昭和20年(1945)に敗戦により在留邦人が引揚げざるまで継続されることとなる。

この間、明治11年(1878)には石川舜台等は辞任し、北方祐央・谷了然是事務所役を罷免され、白華・心泉も更迭されている。12年(1879)には別院は消滅した形となり、明治14年(1881)には別院から出張所に格下げされている。16年(1883)9月12日に本堂が新築され虹口に移転したが、直後の9月15日に布教中止が発令され、10月4日に上海に達した³⁵⁾。18年(1885)11月に布教を再開する通知が出されたが、その間も別院は閉鎖されることなく存続している。その一例を示すものが前田黙鳳が明治18年(1885)に上海に渡航したときの記録である³⁶⁾。

結局、上海に作られた江蘇教校と北京に作られた北京教校は、費用の割に効果が低く、また留学生の育成も上手く行かず、継続しなかった。江蘇教校は明治12年(1879)5月27日に清国教校から国内の教師教校に格下げとなり、東本願寺では日本国内で布教僧を養成するようになった。後年、上海別院に勤務する松ヶ江賢哲・松林孝純は、国内で中国語を修めたのちに中国布教を行った代表例である³⁷⁾。

1-2 上海別院の活動

岳崎正鈍の日記「支那在勤襟志」には、江蘇教校に関して次のような記述がある。

午後第一時、『序分義』開講。(明治10年8月20日)

本日土語恒例検査、余該席莅監。(同年9月6日)

『序分義』講了。(同年10月12日)

以本日起本校生徒大試験。本日土音検査教師蔣文虎・輪番松本白華・教師岳崎正鈍・加藤法城蒞鑑。

(11年1月26日)

本日余乗検査、略述相義与七十五法也。教師加藤法城・輪番(※松本白華)并北方蒙(※心泉)・余同臨蒞。(同年1月23日)

本日宗乗大検査、書目『序分義』『易行品』『浄土論』。臨蒞如昨日。午後説教加藤法城。(同年1月27日)

彼は宗乗(真宗学)を担当しており、試験時には試験監督を務めている。つまり、江蘇教校は布教僧を養成する学校であり、中国語は中国人教師(任鈞溪のちに蔣文虎・孫藹人)が教え、宗乗・漢籍・習字は日本僧が教え、随時試験も行っていたのである。また、北京音習得の為に北京教校が明治10年(1877)11月1日に設立されたが、翌年には閉鎖されたとみられる³⁸⁾。

このほかに、『支那在勤禪志』からは布教僧の日常生活を伺い知ることが出来る。彼の主な仕事は以下の通りである。

①江蘇教校の授業・試験監督、②『真宗説教』(パンフレット)の編纂、③説教、④仏事

まず、①については、すでに述べているので、ここでは省略する。

次に、②については、日記中に「余『真宗説教』第六号脱稿。」などとあることから、別院では毎月『真宗説教』(パンフレット)が発行されており、正鈍は『真宗説教』第6号から第9号までの編纂を担当していることが分かる³⁹⁾。

③については、正鈍は定期的に説教を行っているが、『支那在勤禪志』に見える説教の題目や、「本日因無本邦人參詣無説教」(明治11年3月10日)とあるので、日本人向けに日本語で説教を行っていたことが分かる⁴⁰⁾。

④の仏事については、定例の仏事のほか、在留邦人の要請に応じて随時葬儀・説教などの仏事を行っている⁴¹⁾。当時の在留邦人には領事館・商人の他に、多

数の洋妾がおり、別院では洋妾に対して小栗栖香頂夫人が教育を行っている。

1-3 上海別院の布教僧たちと現地文人たちとの文化交流

正鈍の日記からは洋行時と比べて現地人との交流は活潑であったことが分かる。下層民に対しては説教が行われたほか、別院に出入りする文人（いわゆる「鬻画」「売画」を行って生計をたてている海上派、蔣文虎・孫霽人・馮耕三・王治梅・銭子琴・馮湘如ら）と毎日のように書画・漢詩文のやりとりを行って交流している。

文人たちのなかでも馮耕三は日本に渡航経験⁴²⁾があり、別院開院式に出席しており、『支那在勤襟志』中には彼が頻繁に別院に出入りしている様子が述べられている。彼は筆墨業を営んでいたので、布教僧たちは馮に希望する文人の書画の注文を行い、馮の家を訪ねたり、あるいは彼の案内によって他の文人の家を訪ねるなどして、布教僧と文人たちの交流の橋渡し役を担っていたといえるだろう。

同谷・藤・早海^{ママ}諸氏招飲于馮耕三之宅。⁴³⁾

洋壺弗付耕三（蓋衛氏潤筆也）。⁴⁴⁾

伴馮耕三訪王治梅寓居併贈拙作詩序・靈龜香壺包。⁴⁵⁾

とくに正鈍は馮耕三から頻繁に文具や書画を購入しており、帰国に際しては自分の室号「自笑観」の文字が入った用箋を馮耕三に注文している。⁴⁶⁾

また日記中の明治10年10月8日の記事には

銭子琴先生揮曾所請之法書若干紙而来。筆勢有石凹風起之赴、為之半夜抱膝愛玩不就寢。

とあり、銭子琴の書を入手して正鈍の喜んでいる様子が記されている。

この他、折に触れて清国文人たちを交えた酒宴が行われ、席上では詩文を介した交流が行われている。明治10年9月21日には、布教僧と文人のほかに、領事館から曾根俊虎と大倉雨村が集まって場内の湖心亭で酒宴が行われている。

新北門南湖心亭小集会。客概略錢子琴・孫藹人・馮湘如・蔣文虎・馮耕三以上土人、曾根陸軍中尉・大倉氏・谷氏・加藤氏・早川氏・今川氏・桐山氏与余也。酒巡数行、分字賦詩。余得三江賦一絶、如別記。

明治11年5月22日には、帰国する正鈍のために送別会が開かれており、此等の記事から別院の布教僧たちは、馮耕三のほかに語学教師であった蔣文虎や孫藹人や、王治梅・錢子琴らと頻繁に交流していたことが分かる⁴⁷⁾。

午後五時鐘邀同寓諸友暨結交在滬之清人於滬城外第四馬路聚豐園置酒、来会賓位王寅字治梅金陵人（当時画業大名家）、錢懌字子琴吳中人（儒士善書）、蔣伯威字文虎（上海県之人、当時別院語学教師）、孫士希字藹人金陵白門人（上海県史官）、馮鑒字耕三上海滬城人（商家、筆墨業）、蓋藹人君臨時因不例不得来会见贈送別詩四章且付手簡慇懃告謝。本朝賓位松本白華（別院輪番）、加藤法城（教師）、北方蒙（承事）、今川拾翠（教授方）、清川香雲・龍湖靈鳳（以上四級生）、崖辺巖・望月全祐・本多澄雲・北畠兼祐・瀧義存（以上六級生）、本間実・白尾一也・多賀令住（以上級外生）、藤本見瑞過日来臥病故不与焉、平沢某及余都合二十名也。各贐送別詩草見承賜、就中治梅君為兆倚石聽流図詩画見惠投、且酔後復有詩数章拝雲毫見贈。満屋為拍膝呼快各竭酔而上帰途。（明治11年5月22日）

なお、明治16年（1883）に別院移転に際して馮耕三は保証人になっており⁴⁸⁾、別院とは非常に緊密な関係が続いていたことが分かる。

その他、別院には内海吉堂等の日本人書画家が寄寓しており⁴⁹⁾、鳩居堂から

派遣された安兵衛・巨勢小石などが出入りしている。そうした書画家の一人である吉嗣拝山の『骨筆題詠』には、松西塘（白華）の「骨筆歌毎句押韻拝山仁兄吟壇正」と題した詩があり、

西塘無友昼掩室 報曰客来名其達
曄曰客姓無是吉 一笑握手話不竭⁵⁰⁾

訪ねる友人もおらず部屋に閉じこもっている上海での白華を、同じ咸宜園の流れを汲む旧知の拝山が訪ねて再会した様子が描かれている。また『骨筆題詠』には、心泉の序文⁵¹⁾や、当時別院に寄寓していた吉堂の絵が附されており、齊学裘・胡公寿・吳鞠潭・銭子琴といった上海別院に出入りしている海上派の文人たちと交流している⁵²⁾、白華・心泉ら別院の布教僧たちが、初めて清国を訪れた拝山に文人たちを紹介したとみてよいであろう。なお、本書は「上洋馬馥堂刻印」とあるので、恐らく拝山が上海滞在中に作らせたものと推定される。王治本「光緒丁亥（光緒13年・1887・明治20）春仲遊次太宰府往訪 拝山詞兄談次出示骨筆并索第句為賦長古以応雅属並請 政之」を収録しているが、この部分は後修による増補である。

明治13年（1880）、上海に楽善堂支店を開設した岸田吟香は、当時上海で活躍していた上記の文人たちに対して以下のように述べ、彼らをあまり評価していない。

（前略）処々ノ書画文人ヲ尋子候処、随分学者先生モ有之候得共、皆経学者ニテ歴史ヲ能ク読ミタル人ハ稀ナリ。其経学ト申スモ修身上ノ志ヨリ出タルニハ無ク皆出身ノ為メニ致候学問ニテ、八股文ノ種ニ諳誦致居候者多シ。詩ハ可ナリニ出来候者モ有之、書ハ下手多シ画モ亦下手多シ。医者ハ誠ニ無学ニテ殊ニ杜撰ナル者計リナリ。僧侶ハ全ク乞食ノ仲間ニ御座候。更ニ文学ヲ解シ候者無之（以下略）⁵³⁾

(前略) 上海ハ至俗ノ地ニテ文学ノ士ハ一向ニ無御座候(中略) 然ルニ書画ハ潤筆を貪ルガ為メニ糸茶富商ノ雲集スル上海ニ無之テハ不都合ト相見エ、追々各省ヨリ筆硯ヲ携テ吳淞江ニ来集スル景況ニ御座候。張子祥・楊伯潤等ノ書画ハ昼夜筆管ヲ握リ詰ニテ、実ニ流行紺屋ノ形置キヨリモ忙敷様子ニ御座候。日本ニテ評判スル胡公寿ハ支那ニテハ格別ニ誉メ不申、只々一通リノ書家ニ御座候。元来日本人ハ真ニ目ナク耳ヲ以テ目トスル方ニ御座候故、誰カー、二人公寿ガ画ヲ持帰り自慢致シ候ヨリ遂ニ胡ヲ以テ第一等ニ置キ候者ト相見エ申候、実ハ張子祥ヨリ下ル事数等ニ御座候。第二ハ楊伯潤、第三ハ胡公寿、其餘ハ胡鉄梅ヲ以テ頭トシ朱夢廬輩ノ如キ数人ハ皆伯仲ノ間ニテ王冶梅ハ下等ニ可有之カト存候(以下略)⁵⁴⁾

(前略) 上海ハ俗地ニテ更ニ風雅ノ遊び等ハ無御座、日本ニテ文人ト唱ヘ候書画家ハ全ク当地ニテハ職人同様ノ者ニテ、書画ヲ頼ミ候ヘバ、紙或ハ絹ノ幅ヲ争ヒ物尺ヲ持出シ、山水ニテ代洋銀何程、花卉ニテ何程、鳥ヲ一羽ニテ何程、二羽ニテ十錢高ナト申ス事ニ御座候。頼ム人モ先生ヲ以テ遇セズ(但シ先生トハ猶日本ニテ先生ト云フガ如シ) 実ニ風韻モ無之事ニ御座候。宜ナル哉、其画ノ俗々トシテ嘔吐ス可キヤ。扱無用ノ事計リ綴リ申候。草々頓首。⁵⁵⁾

こうした岸田の意識が、のちに心泉を介して愈樾に『東瀛詩選』の編纂を依頼するようになっていったものと思われる。心泉は明治15年(1882)に杭州を訪れ愈曲園と知合い、以後『東瀛詩選』の編纂に関わっているが、これは岸田のより一層教養のある清国文人との交流を欲する求めに応じたものであり、心泉は当時すでに上海の文人たち以外にも人的関係を築いていた証左であろう。

正鈍の日記からは文人たちの交流と比較して、遠隔地へ視察・外出等は少なく、清国政府高官や高僧たちと接する機会も少ないように思われる。しかし、岳崎の帰国後、別院では徐々に仏教者・官僚・名士たちとの関係が構築されていたものと思われる。現在、常福寺に残されている資料の名刺には、『支那在勤禪

志』中に見えない名前が多く、心泉の詩稿を見ていくと、邦人では塩川一堂（樂善堂）・江南某・上田某・大原某・長谷川某・金子某・高崎某・森田某といった名前が見られ、中国人では詩稿の中にも別院に出入りしていた人物以外の名前、徐竹堂・葛理斎・程滌塵・席春漁・葉新濃などが見られ、岳崎の帰国後の交流の拡がりと変化が分かる。

明治14年（1881）5月、杭州西湖に遊んだときには、松ヶ江賢哲・立石某・諫山麗吉・圓山大迂・岸田吟香といった明治10年頃には見えない名前が見られる。明治16年（1883）に心泉が病のため帰国し、その後は松林孝順や松ヶ江賢哲が吟香に同行して各地を旅行しているので、布教僧と岸田吟香との関係が密接だったことが分かる⁵⁶⁾。岸田吟香や圓山惇一からの書翰⁵⁷⁾によると、この後上海では張子祥・胡公寿といった文人も亡くなり、領事館員で画家でもあった大倉雨村が帰国し、日清戦争直前の上海には文才のある日本人がいなくなり、清国文人たちとの書画や詩文を介した交流も下火になっていった。

大倉雨村画伯者帰朝致候。胡公寿・張子祥者死矣。曲園翁者無事也。（岸田吟香書翰 明治19年7月7日）

現在之居留本邦人ニハ真ノ風流人一名も無之、為ニ同好ニ相示シ自慢スル事も出来ズ。依而入手之上ニ而も誠ニ楽ミ薄ク候。閣下之御在上中之頃ハ寔ニ愉快候モ、今洋学家等之俗物而已ニ而雅談等皆無之御座候（圓山惇一書翰 明治27年2月24日）

1-4 明治後期の上海別院

日清戦争後、明治30年代に清国布教活動は本格的に再開された。石川舜台の指導のもと、本山からも両連枝が視察のため派遣され、明治初期の上海別院に勤務した谷了然や北方心泉は、再び清国に赴き布教活動を行うこととなる。この時の布教活動の特徴は前回と同様、日本からも留学生を派遣したほかに、中流以上の中国人青少年に日本語教育等を行うために学校を各地に設立している

ことである。江南・福建を中心に東西本願寺等により多数の学校が設立され、心泉は東本願寺が南京に設立した金陵東文学堂の校長となっている。

心泉の日記の中には、中国人留学生を日本に派遣した記述が見え、東亜同文会・陸軍軍人・上海領事の小田切萬寿之助らと頻繁に連絡を取合っている記述がある。またこの時はすでに劉坤一・楊仁山といった清国高官や土地の有力者との関係も構築されていたので、彼らの協力を得ることができた。金陵東文学堂の開院式に彼らは同席しており、明治初期の上海別院の開設式とは対照的である。しかし、これらの学校も義和団事件で一時閉鎖され、のちに再開したが予算不足のため日露戦争前後に閉鎖されることとなった。また、東本願寺が各地に設置したこれらの学堂や別院・布教所では、中国人との間に摩擦が発生し、閉鎖を余儀なくされることとなる。またこの時期に、小栗栖香頂と楊仁山との間で真宗の教義をめぐる大論争が起きている。

ま と め

白華らの洋行は政府の後押しを受けたものの、本山からの正式な派遣ではなく、何ら具体的な成果をあげずに終了した。一方、彼らに刺戟された香頂は北京へ渡航し、中国語を学びながら当時の中国仏教の実態を目にした。彼は北京滞在中から具体的な中国布教計画を企図しており、本山に対して布教に関する提言を行い、帰国後は積極的に執筆活動をおこなった。

明治9年(1876)には上海別院が開設され、中国人に対する説教を行うほかに、日本からの留学生に対して中国語で説教を行うために江蘇教校が設立された。そこでは中国人教師による語学教育が行われ、布教僧たちは留学生たちの引率・監督および真宗学・漢学等の教育にあたったが、この教育体制はうまくいかず、まもなく頓挫してしまった。また、布教自体も本山の内紛等により中止となってしまった。しかし、派遣される布教僧たちは現地人との交流を要するために学問のある僧侶が起用された。彼らは幕末に生まれ、漢学の素養があり、漢詩文をもって中国人と意思疎通の行うことの出来た最後の世代であり、実

際に彼らと中国文人たちとの間では詩文を介した交流が行われた。当初予定していた通りの布教活動は実現しなかったが、徐々に中国側との人脈が拡がり、楊文会・俞樾をはじめとする様々な人々の知己を得ることができた。

心泉は別院在勤中に文人と交流する中で中国の書風に触れ、のちに明治時代を代表する書家となったが、輪番の白華や正鈍は以後海外布教活動に携わることはなかった。

明治30年代になると、本格的に布教が再開され、これまで培ってきた中国での人脈と日本政府の支援を背景に、江南および華南各地に学校・布教所を設立した。しかし各地で中国人と摩擦・衝突および真宗教義をめぐる大論争が生じ、さらに本山の内紛等により予算が削減され、再び布教の中止を餘儀なくされたのである。

【註】

- 1) 下巻。黒龍会、1936年。
- 2) 対支功労者伝記編纂会、1936年。
- 3) このほかに佐藤三郎「明治三三年の廈門事件に関する考察—近代日中交渉史上の一齣として—」（『山形大学紀要（人文科学）』第5巻2号、1963年）、「中国における日本仏教の布教権をめぐる—近代日中交渉史上の一齣として—」（『山形大学紀要（人文科学）』第5巻4号、1964年）などがある。
- 4) 近年の中国人研究者の成果として次のようなものがある。
陳捷『明治前期日中学術交流の研究—清国駐日公使館の文化活動—』汲古書院、2003年。
陳繼東『清末仏教の研究—楊文会を中心として—』山喜房佛書林、2003年。
王宝平『清代中日学術交流の研究』汲古書院、2005年。
劉建雲『中国人の日本語学習史—清末の東文学堂—』学術出版会、2005年。
- 5) 高西賢正編『東本願寺上海開教六十年史』東本願寺上海別院、1937年。
小島勝・木場明志『アジアの開教と教育』（『龍谷大学仏教文化研究叢書Ⅲ』法蔵館、1992年）
この他に、科研費助成研究「近代日本の仏教者における中国体験・インド体験」プロジェクト（2006年度採択、代表：小川原正道武蔵野学院大学助教授）では、東西本願寺を主要な対象とした研究を進めている。
- 6) 筆者のこれまでの研究成果として、以下のものがある。
 - ①『「滬游雜記」と『上海繁昌記』について』（二松学舎大学大学院文学研究科『二松』第20集、2006年）。
 - ②『松本白華と玉川吟社の人々』（二松学舎大学21世紀COEプログラム『日本漢文学研究』第2号、川邊雄大・町泉寿郎、2007年）。
 - ③『明治期の日本国内における唐本流通について—岸田吟香書翰を中心に—』（二松学舎大学21世紀COEプログラム・浙江工商大学日本文化研究所、「書籍之路与文化交流」国際学術研討会予稿

集『近現代分科會論文集』2006年)。

- ④町泉寿郎・川邊雄大共編「明治初期における東本願寺布教僧の日中文化交流について—松本白華・北方心泉を例として—」(南京大学文学院・人文社会科学高級研究院・域外漢籍研究所『域外漢籍國際學術研討會論文彙編(上冊)』2007年)。
- 7) 松本白華(1838～1926)、松任の人、真宗大谷派本誓寺の第26代住職。名は嚴護、白華・西塘・梅隱・林泉・孤松・仙露園と号す。幕末、大坂の広瀬旭莊の塾に学ぶ。維新後、富山藩合寺・浦上天主教事件に奔走。明治5年(1872)、門主・大谷光瑩や成島柳北らと共に歐洲視察。洋行をはさんだ東京で活動したこの間、長三洲をはじめ明治の高官たちと漢詩による交流を行っている。明治10年(1877)から11年(1878)まで東本願寺別院上海輪番を勤めた。明治初期の東本願寺の海外布教を考える上で不可欠の人物であり、当時では西洋と中国を両方体験した唯一の日本人僧侶である。主な著作に、『松本白華航海録』(真宗史料集成第11巻『維新期の真宗』同朋社、1975年)がある。
- 8) 小栗栖香頂(1831～1905)、豊後妙正寺住職。八洲または蓮泊と号す。咸宜園の三才子といわれ、弟の小栗憲一も咸宜園出身であった。維新後、本山を東京に移転することを提唱した。明治6年(1873)7月渡清、北京で翌年8月帰国。明治9年(1876)7月、東本願寺上海別院開設に関わる(～10年1月迄)。著作に『真宗教旨』『北京護法論』『喇嘛教沿革』などがある。
- 9) 北方心泉(1850～1905)、金沢の人、真宗大谷派常福寺の第14世住職。名は祐必のち蒙。号は心泉・雲進・小雨・月莊・文字禪室・聽松閣・酒肉和尚など。石川舜台の慎憲塾・松本白華の遙及社・翻訳局で成島柳北から学ぶ。明治10年(1877)から16年(1883)まで清国布教事務掛として上海別院に勤務。この間、愈曲園『東瀛詩選』の編纂に岸田吟香とともに関わり、清国の文人達と交流を深める。明治31年(1898)から33年(1900)まで南京・金陵東文学堂学長。明治を代表する書家の一人で、北派書風を楊守敬とは別にいち早くわが国に紹介。明治23年(1890)、第3回内国勸業博覧会に出品し入賞。

主な参考文献として次のものがある。

本岡三郎編『北方心泉〔人と芸術〕』(二玄社、1982年)

金沢市教育委員会文化財課編『金沢・常福寺歴史資料目録』(1999年)

金沢市教育委員会文化財課編『金沢・常福寺歴史資料図録』(2001年)

- 10) 岡崎正純(1836～1885)、越前真宗大谷派祐善寺十八世。字は法泉、漱石・悟外・癡羊、酔月楼、秋雲、自笑、自笑人と号し、居室を自笑観と号し、諡は大乗院。明治10年(1877)7月から11年(1878)5月まで三等説教者兼四等教師として上海別院に在勤。主な著作として、『支那在勤棟志』(真宗史料集成第11巻『維新期の真宗』、同朋社、1975年)がある。
- 11) 江藤新平関係文書、「長三洲書翰」(佐賀県立図書館所蔵)には長三洲から江藤新平へ隄静齋の出仕を働きかけた書翰が3通残されている。1通目は明治5年3月31日に失職中の隄の仕官を働きかけたものである。

兼而申上置候隄生一条、如何御処分被成下候哉、取捨被仰聞被下候ハ、難有奉存候。同人も久布罷官、頗有寒色候故、不顧冒瀆、毎々申出候事ニ御座候ニ御座候。御諒恕被下度奉冀候。右草々。頓首。三月十一日

尚々同人儀ニ付、何か故障之儀有之候ハ、無御包藏申聞可被下候。

江藤副議長殿 急啓 長茨

2通目は同日、長三洲に対して隄に関する照会を求めに対する返事である。

御細諭辱奉拝領候。隄生ハ元彈正之少諭相勤居候。其人文筆書記等之義長処ニ有之、其他随分御用立可申候。大掌記・権大掌記之処相応敷与奉存候。静岡県人にて、赤阪ニ住し候。右申上置候間可然奉願候。草々頓拜 三月十一日 緘 江藤副議長殿 差上置 拜啓 長茨

3 通目は隄が採用されたことに対する礼状である。なお、これにより隄は教部省八等出仕となっている。

隄生之儀御採用被下、千万奉感謝候。御召状早速同人より為持相達候。他日拝青御礼可申上候。(以下略)

三月十九日

江藤副議長殿復 長茂

- 12) 江藤新平関係文書、「松本白華書翰」(佐賀県立図書館所蔵)。

江藤殿下 白華

(前略) 過日者両旧弊主参上陪従、御面謁被仰付、殊ニ長座奉恐入候。然者旧弊主当職此度着京、今日第三字後参上仕り、今後御入懇奉願上度。小子敢而願上候者、当住儀小心之性質此頃之形勢誠ニ恐怖不少少子共より申入候而も未タ安心不仕、何卒殿下より安心して布教仕候様之尊命を下賜候様、深く御依頼奉申上候。萬々拝謁を奉煩申上度候。草々謹言 拝具

壬申 六月十四日 白華 稽首

封六月十四日 本誓寺(封)

- 13) 『松本白華航海録』(註7に掲出)。

「明治五年柳翁洋行会計録」(『明治文化全集』第7巻「外国文化篇」、明治文化研究会、1928年)。

- 14) 今日我々が目にする成島柳北『航西日乗』は、もともと読み物になるという前提で書かれており、後に原文に手を加えて『花月新誌』に掲載されているが、松本白華『松本白華航海録』は、もともと他人に読まれることを想定しておらず、白華が書いた書翰や借用証書の写しが載せられており、白華と門主との確執や、金銭の工面に奔走したあとが見られる。また、柳北に比して西本願寺僧や政府関係者と頻繁に接触しており、宗教に関する記述が多いのが特徴である。

- 15) 江藤新平関係文書「小栗憲一書翰」(佐賀県立図書館所蔵)。

- 16) 『松本白華航海録』明治6年1月2日に、「観本朝新聞称真事誌九月十三日已下数枚」とあり、大使館で自分たちが出奔した記事を読んでいる。

- 17) 『松本白華航海録』明治6年1月18日に、「閩教義新聞中有使僧侶記名字之布告及琉球封王列華族之詔。」とある。

- 18) 江藤新平関係文書「松本白華書翰」(佐賀県立図書館所蔵)。

- 19) 『松本白華航海録』明治5年12月30日(旧暦12月1日)に、「夜与島地・梅上・坂田同訪ロニイ氏。」とあり、明治6年1月7日には「羅尼氏来。夜同原田五一過羅尼氏」とある。

- 20) 『松本白華航海録』明治6年1月5日に、「与石川徘徊市街、又与閩同閩書肆。」とある。

- 21) 『松本白華航海録』明治6年1月10日に、「先是拿破侖三世客于英倫敦有石癩疾遂殂。嗚呼蓋英雄末路郎当可憐也」とある。

- 22) 『松本白華航海録』明治6年1月15日に、「終日裁書託東久世公東帰寄故郷」とある。

- 23) 松本白華の洋行に至る過程と、洋行中に関しては、川邊雄大・町泉寿郎「松本白華と玉川吟社の人々」(註6に掲出)を参照されたい。

- 24) 明治7年8月18日上海を発って、同21日長崎に着いている。

- 25) 香頂は日本人で北京語学習者の嚆矢といえる。のちに彼が北京滞在中に、陸軍から3名の留学生が派遣されている。また、外務省は南京音を学習しており、北京語習得のために留学生を北京に派遣するのは明治9年のことである。

- 26) 魚返善雄「同治末年留燕日記」(『東京女子大学論集』第8巻第1号、1957年)。

- 27) 陳継東『清末仏教の研究—楊文会を中心として—』(註4に掲出)に、一部が翻刻されている。

- 28) 上海別院は数度の組織の縮小や改変および移転はあったものの、東本願寺が中国に設立した他の別院や学堂とは異なり短期間で閉鎖されることなく、昭和20年に閉鎖されるまで約70年間に亘つ

て東本願寺の中国における活動の拠点であり続けた。

- 29)『東本願寺上海開教六十年史』(註5に掲出)。

- 30) 香頂は上海での布教のために、『南京語説教』という書を著して上海語(任鈞漢)と南京語(孫謙人)を習っている(※筆者註、彼は北京語を話すことができたが、当時の江南では北京語ではなく南京語が用いられていた。陳維東「1876年日本仏教の伝道—『南京説教』を中心として—」東京学芸大学「国際教育研究」第20号、2000年)。

また、「入仏式報告書」(『東本願寺上海開教六十年史』、註5に掲出)には、「明廿三日より松江府の人任鈞漢と申者を更に教師に雇入、之をして先づ信徒ならしめ、次で説教者として、日野順証に昼夜説教の土語を学ばせ、次回の説教には、必ず土語を以て説教為致候心得に御座候」とあるので、別院ではいかに上海語の習得に力を入れていたかが分かる。

- 31)『東本願寺上海開教六十年史』(註5に掲出)。

- 32)「上海別院公務」(『雑録』[明治初]写(白華)、白山市立松任図書館白華文庫蔵)。

- 33) 註32に掲出。

- 34)『東本願寺上海開教六十年史』(註5に掲出)。

- 35) この間、明治17年(1884)には上海に東洋学館が設立され、清仏戦争取材のために尾崎行雄らが上海に渡っている。また同年、岡千仞が清国を漫遊し、楢原陳政が兪樾の門下生となっている。

- 36)『黙鳳書話会第一回講演「黙鳳道人」』(ロバート・キャンベル「東京鳳文館の歲月(下)」『江戸文学』第16号、1996年10月)には以下のような記述がある。

当時(※明治18年夏)私(※不詳)は東本願寺の別院に寄寓しておりましたが、(中略)其頃東本願寺別院に布教師として三人の日本僧が居つて、其中に島田一陽と云ふ男が在つた。処が其男が毎晩々々本願寺の料理人兼本願寺の買出小使それに「ラオチユー」と云ふ酒を買ひに遣る。(以下略)

また、「宗方小太郎日記」(明治21年、大里浩秋「上海歴史研究所蔵宗方小太郎資料について」、神奈川大学人文学研究所「人文学研究所報」第37号、2004年。同「宗方小太郎日記、明治22～25年」、同39号、2007年)には、宗方が頻繁に東本願寺上海別院に出入りしている記述がある。

- 37)『東本願寺上海開教六十年史』(註5に掲出)によると、彼らは大阪の難波別院の教師教枝支那語科で南京人の汪松坪という人物から南京語を学んでいる。

- 38)『東本願寺上海開教六十年史』(註5に掲出)年表によると、「明治十一年一月、北京布教停止せられ、直隸教校廃せらる。」となっているが、岳崎正純『支那在勤禪志』(註10に掲出)明治11年3月22日には、「直隸教校廃止違有之、余信聞」とある。

- 39) 明治10年8月18日。このほか『支那在勤禪志』(註10に掲出)中には以下のような記述が見られる。

余『真宗説教』第七号脱稿。(明治10年9月4日)

「説教草稿」第八号脱稿。(同年10月1日)

『真宗説教』第九号松本白華殿草成持求剛補于余成賛而直啓上。(明治11年1月7日)

- 40)『支那在勤禪志』(註8に掲出)中には以下のような記述が見られる。

朝勤行六時。日中九時。午後吾初説教、讀題「像法ノトキノ智人モ」。(明治10年8月12日)

説教『御一代記』「口ト身トハ似スルモノナリ、心ネカヨクナリカタキモノナリ、惟分心ノカタヲタシナムベキコトナリ」。(同年10月21日)

午後説教、蓮祖法語「仏法ニ厭足ナケレハ・・・」。(同年12月23日)

本日説教「今歳ヨリト思ハヌ年ハナカリケリ」句意詳弁。(明治11年2月3日)

- 41)『支那在勤禪志』(註10に掲出)中には以下のような記述が見られる。

午後説教後領事館詰官員申経、輪番谷・加藤及余。(明治10年12月2日)

- 異人売妾之本朝人、向娠焉、要婦崎易而分娩、然不能分娩而死矣。計音到上海其女朋某等請為死者読経於本院、午前十一時三経読誦。(同年10月19日)
- 天長輪。輪番(※白華)・生徒相携賀於領事館。余有風邪氣故不赴。(同年11月3日)
- 42)『築地居留地』附表A「明治四年至明治九年末居留地外住外人表」(『都史紀要』第四、東京都、1957年)には、「(期限)明治八年十一月より、(姓名)馮耕三、(職業)製筆伝習、(住所)通旅籠町、(雇主)通旅籠町一 高木五郎兵衛」とある。
- また、『支那在勤禪志』には「午前同谷・藤二氏過馮耕三居主人者、筆墨商業、時々航于本朝至西京持故能通国音。」(明治10年8月15日)とある。
- 43)『支那在勤禪志』、明治10年8月19日。
- 44)『支那在勤禪志』、明治10年10月12日。
- 45)『支那在勤禪志』、明治10年11月11日。
- 46)自笑人用毫之銘筆五拾枝自笑觀三字篆刻之、十行紅單紙一千一百張刷得來。(明治11年5月10日)刻自笑觀三字十行界紙板并朱浩着色盆栽画幅馮耕三携到。(同年5月16日)
- 47)このほかに、明治10年11月30日には谷了然の送別会が行われている。
- 谷了然還日本今宵開粗筵于滬城老北門外鴻運樓。集合各士王治梅・蔣文虎・(※馮)耕三・曾根陸軍大尉及余輩数名也。珍羞如山酒瓶如泉。谷氏作留別詩一章見示衆王治梅即和之(詩欠記)、余亦次提筆和之詩曰、各位送君詩作義、休娛走句輕忽、栢盤狼藉今宵興、綵在先生請吃中。満座為拍手哭。
- 48)『東本願寺上海開教六十年史』(註5に掲出)。
- 49)画生内海吉堂者寓本院。(明治10年9月22日)
- なお吉堂に関しては、「読売新聞」(明治10年4月20日)に
- 越前敦賀の内海吉堂といふ人ハ、兼て支那へ画の修業にいきたいと思つて居たが、何ぶん入費がかゝるゆゑ金策ができず、迎も望みハ達しまいとあきらめた。心ざしを感じて有志の人が数百金を募り是を内海氏へ送り、支那ゆきを県庁へ願つて出ました。
- とあり、また同年5月15日には以下のような記述がある。
- 越前敦賀の内海吉堂さんが、画の修行に品へ行れる事は六百七十三号に出てありますが、いよいよ其筋より許可を受け、今月四日に同所の全盛樓にて送別の宴を開き大そう盛んな事であり、又同所ハ昨今米相場もよほど下落したといふ。
- さらに、「松井耕雪宛書簡等貼交屏風」中の「内海吉堂書簡」(6月26日付、個人蔵、)には、(前略)廿三日夜十一時上海着、田代屋止宿。即本願寺別院へ赴候処、無阻止宿許呉候二付、二三日田代屋ニ休憩仕、今明日ニ別院へ引移り可申心得ニ罷在候(以下略)
- とあるので、吉堂は明治10年6月23日に上海に到着し、すぐに別院に寄寓している。
- 50)松本白華『白華餘事』(大正5年)に収録する「骨筆歌」の解説には「今茲戊寅五月携此遊支那」とあり、「白華客居昼掩室、時有剥啄響戸聞、道是宰府吉嗣達、一笑握手叙久闊」となっている。このほかに白華は「滬上雜詩」として以下のような文人をうたった詩を載せている。
- 文彩風流翰墨場 申江月旦品評忙
青山緑水胡公寿 啼鳥飛花張子祥
- 51)なお常福寺所蔵の心泉筆「吉嗣拝山作品集序文」(『金沢・常福寺歴史資料図録』註9に掲出)は、この序文の草稿と思われ、若干の異同がある。
- 52)上海における拝山の活動に関しては、長尾直茂「明治時代の或る文人にとっての中国—明治十一年、吉嗣拝山の清国渡航をめぐる—」(『山形大学紀要(人文科学)』第15巻第1号、2002年)に詳しい。長尾氏はこの中で、拝山は光緒4年(1878・明治11)2月頃に渡清し、同年5月中旬に、陳曼寿・馮鏡如とともに同じ船で日本に帰国したと思われることを指摘している。しかし、『支那

在勤禪志』(註10に掲出)によると、同年5月22日(陰暦4月21日)に行われた岳崎の送別会には陳曼寿が同席しており、心泉の序文末には「戊寅夏六月加賀方蒙心泉識於上海寓樓」とあるので、拝山たちの帰国は6月であろう。

- 53) 「岸田吟香翁上海ヨリ甕江先生ニ贈ル書簡ノ抄録」(「朝野新聞」、明治13年3月9日)
- 54) 「上海岸田吟香翁ヨリ淡々社(即旧一円吟社)諸君ニ寄セシ書牘」(同、明治13年5月19日)
- 55) 「吟香翁書牘ノ続」(同、明治13年5月23日)
- 56) 明治17年(1884)暮れに、吟香は松林孝純とともに蘇州の俞曲園を訪れている。
- 57) 金沢市・常福寺蔵。『金沢・常福寺歴史資料目録』(註9に掲出)、「九、書簡日記類」101頁、17(書簡 岸田吟香・小野湖山から心泉宛)および同105頁、72(書簡 圓山大迂から心泉宛)

* 討議要旨

郭南燕氏は、①東本願寺の僧侶たちが、なぜ仏教の本場と思われる中国で布教活動を試みたのか、②キリスト教(仏蘭斯僧)の布教活動を手本にした理由は何なのか、③引用の「清国教校条規」や『支那在勤禪』の文中に「土語」「土人」などの表現が見られるが、これらは差別的意味合いを含んだものなのか、と質問し、発表者は、①小栗栖香頂が渡清した際、予想に反して中国には名僧が少なく、キリスト教・イスラム教勢力から仏教を守護しようという意図も理解されなかったから、②キリスト教の親切的奉仕活動が人々の心をつかんでいたので、布教の方法を参考にした、③「土地の言葉」「土地の人」という意味であり特段蔑視のニュアンスはない、と回答した。